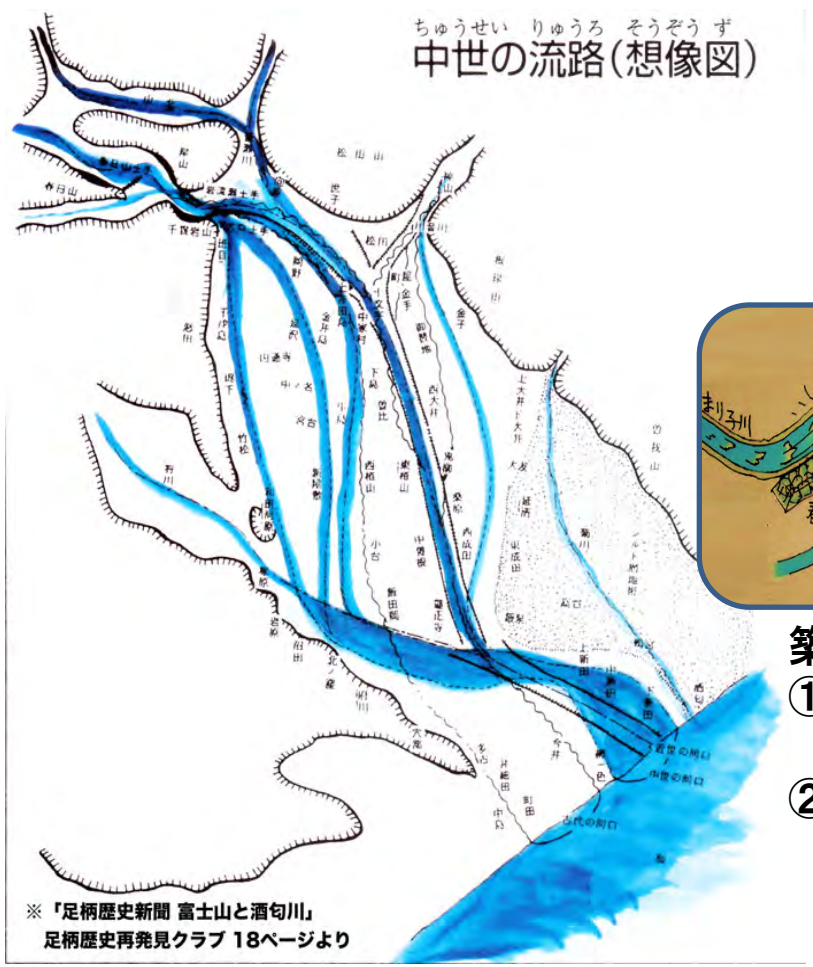
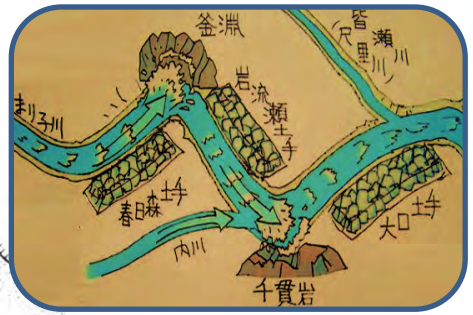
大久保氏による暴れ川酒匂川の治水

大久保忠世と忠隣親子により、春日森土手、岩流瀬土手、大口土手（取水口含む）の築堤と河川流路の整備・築堤さらには用水路の整備が行われた。収穫が倍増？

忠隣の股肱の臣大久保長安（1545～1613）は元武田の家臣であり、甲州流の治水法に精通していた。大久保氏の酒匂川の治水に携わったものと推測される。



※「足柄歴史新聞 富士山と酒匂川」
足柄歴史再発見クラブ 18ページより

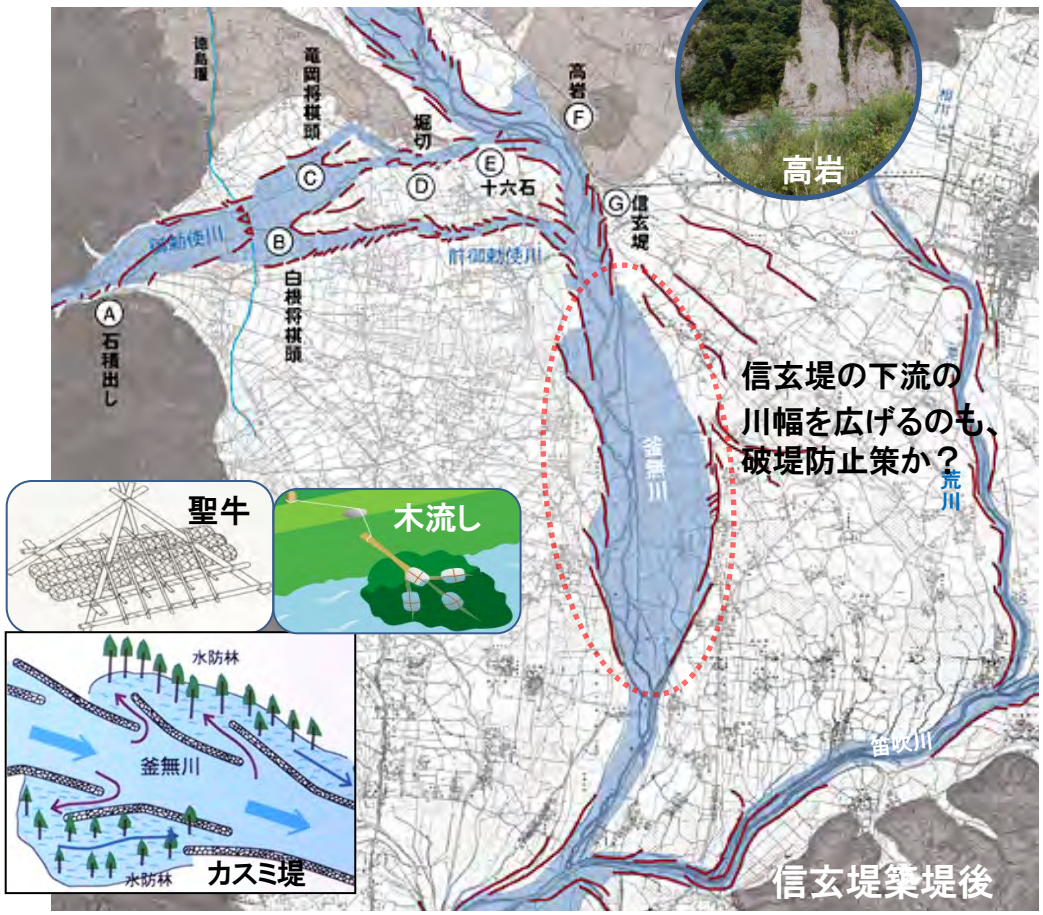


築堤の基本
①激流を岸壁に当て、堤防を直撃しないようにする。
②破堤を防ぐため堤防を2重にしたカスミ堤を設ける。

※「足柄歴史新聞 富士山と酒匂川」
足柄歴史再発見クラブ 18ページより

甲斐の信玄堤の土木工法

甲府盆地じゅうに御勅使川、釜無川が暴れまくっていた。
天文11年(1544)に、武田信玄により堤防築造が着工したとされている。



1、御勅使川(みだいがわ)が山から扇状地へ流れ込む場所に石積出し(A)を設けて、河流を北側新河道へ向けさせた。
2、御勅使川に高岩に向かう新しい河道を開鑿する(堀切　D)と同時に、流れが当たる扇頂部に将棋の駒の頭のような尖った堤防を築き(将棋頭　B･C)、御勅使川が増水したときにだけ南側旧河道にも流れるようにした。
3、御勅使川と合流する手前の釜無川左岸に大きな石を置き水勢を弱めた(十六石　E)･･･春日森土手の機能？
4、御勅使川と合流した釜無川の流れを赤坂台地西端の崖にぶつけ(高岩　F)、水勢を弱めるとともに、直接信玄堤(G)へ流れが向かわないようにした。･･･釜淵･千貫岩の機能と岩流瀬土手･大口土手
5、信玄堤の河流に大水･洪水対策としてカスミ堤を設けた。水制として木枠と蛇籠を組み合わせた聖牛も使用。大水時の急流･渦流による洗掘に対し堤防･出しの破堤防止のため木流し等も使用されたと思われる。

大口土手決壊

- 大口付近の標高：　河床約70m、土手道約80m、土手下の田んぼ約70m。（≒天井川）
- 宝永噴火直後は、御厨・山北地区の降砂流入で河床は現在よりも高かったと想定される。
- 河川勾配が急。（釜淵82m　千貫岩74m　大口橋72m）

- 春日森土手・岩流瀬土手が破壊されると激流は大口土手を直撃する。
- 大口土手が決壊すると足柄平野西側は洪水になる。

酒匂川の洪水　宝永の噴火以降

和　暦	西洋暦	内　容
文禄2年、慶長14年	1593、1609	岩流瀬土手(1593)、・大口土手(1609)が大久保氏により築堤。
宝永4年11月23日	1707.12.16	富士山宝永大噴火始まる。
宝永5年6月22日	1708.8.8	岩流瀬土手・大口土手決壊、足柄平野大洪水。翌年復旧
正徳元年7月27日	1711.9.9	大口土手再度決壊
正徳4年3月11日	1714.4.24	再度決壊、河道が大口から延沢・曽比・栢山へ。以降1726年まで河道修復はなし。
享保11年	1726	大口土手(文命堤)・岩流瀬土手田中丘隅により復旧。河道を平野の東端に戻す。
享保11年7月	1726.8	吉田島・曽比の西岸、金手・西大井の東岸決壊。
享保16年5月15日・6月晦日	1731.6.19.8. 2	金手・西大井・鬼柳の東岸土手決壊。
享保19年8月7日	1734.9.5	岩流瀬・大口の土手決壊。
享保20年	1735	蓑笠之助　岩流瀬・大口土手最終復旧。

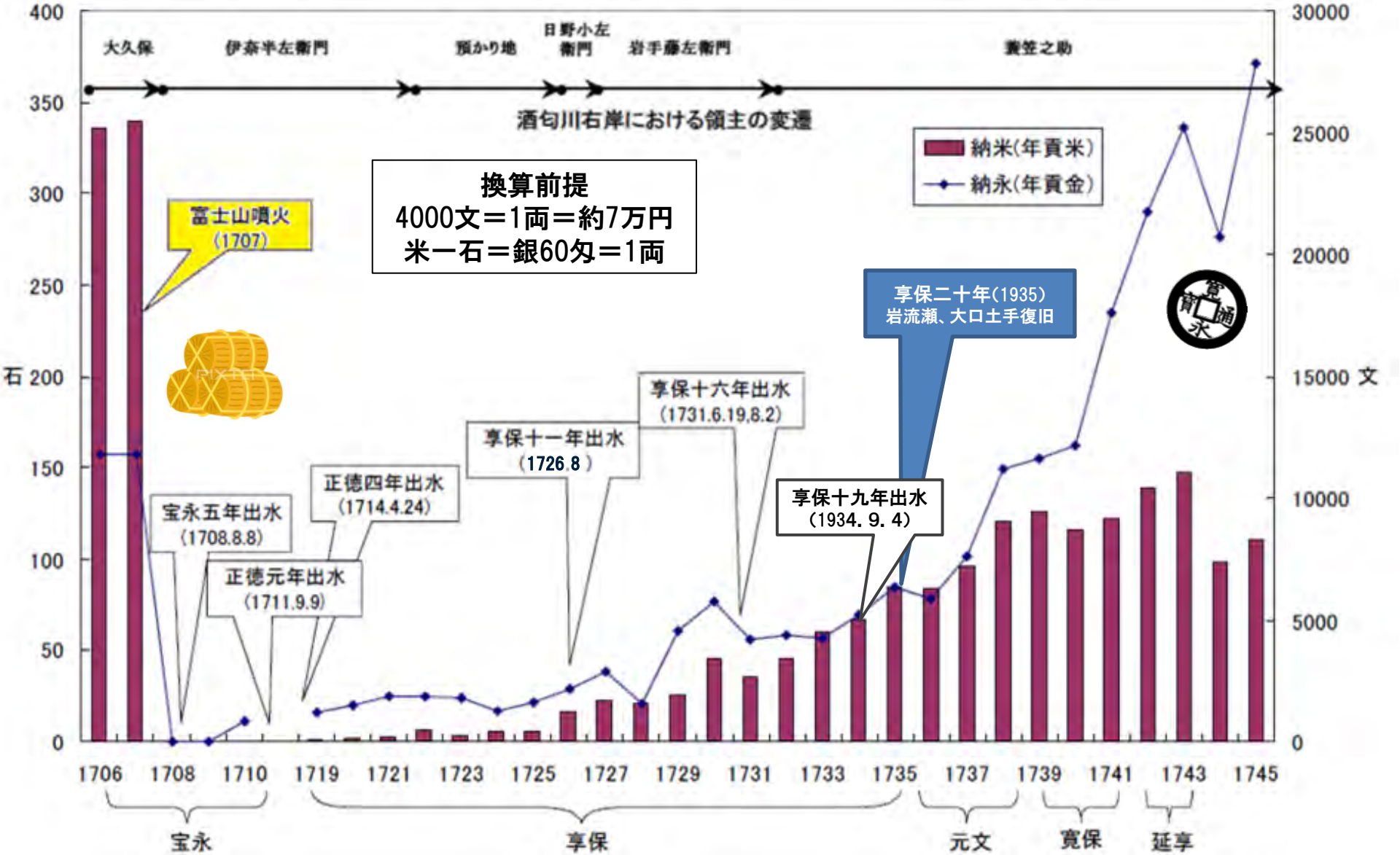
これ以降も酒匂川流域の堤防の決壊、洪水は起きているが、大口土手の全面決壊は起きていない。

洪水の避難場所

足柄平野の洪水の被害甚大な班目・千津島・岡野・壇下・竹松・和田河原の大口水下水損六カ村は、怒田丘陵の上に飛び地をもらい、そこで避難生活を送った。
「アサヒビール奥の神護山」と「切通しを挟んだ地域」の2か所あった。

金井島村（開成町）の年貢上納高の推移

1746年の年貢(米換算)120石は宝永噴火前350石の1/3程度



（小田原市(1999)，瀬戸(1982)より作成）

川村(山北・向原) の復興

歴代湯山家当主の尽力

宝永期以前の山北図

掘割工事後の山北図

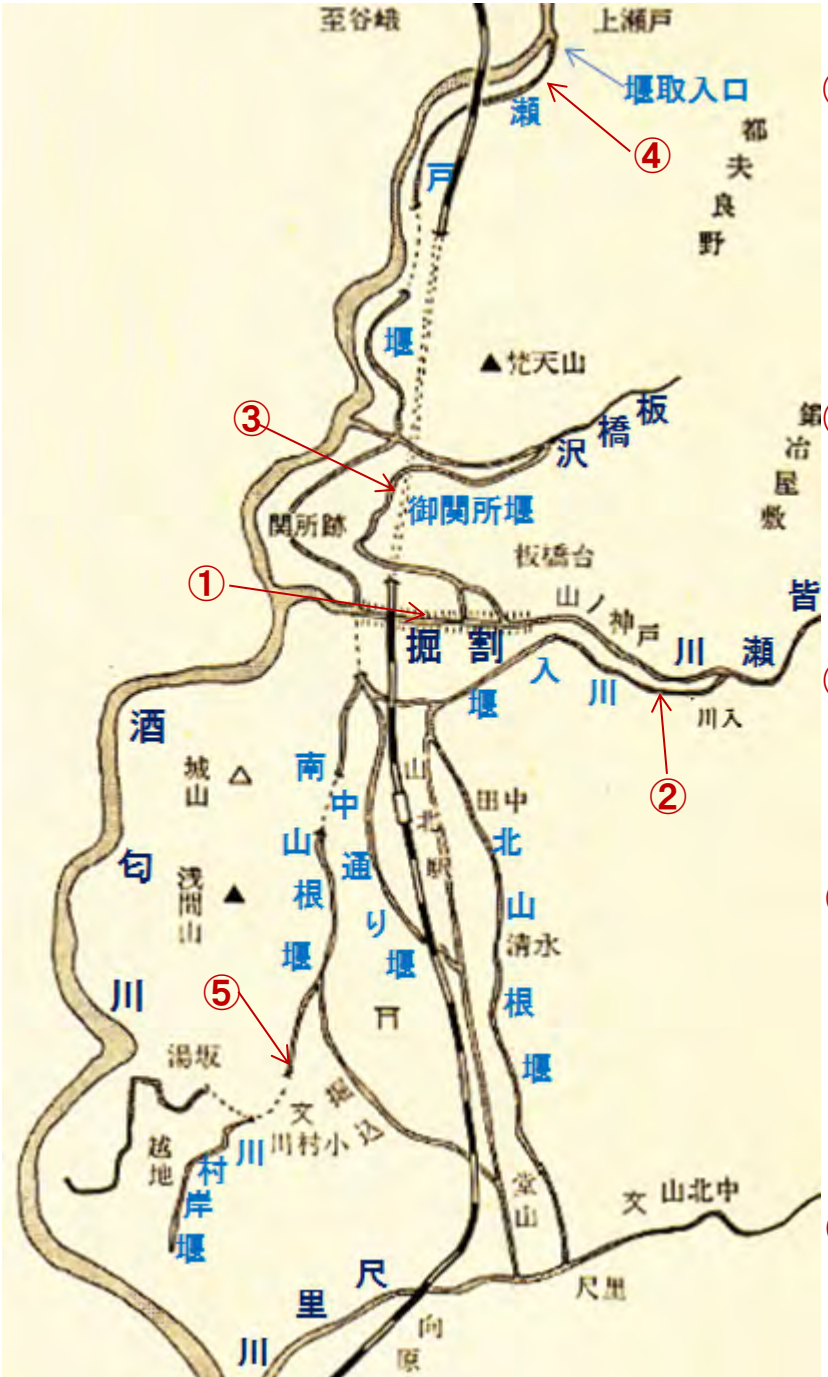
湯山家六代目弥五右衛門の嘆願により、幕府は、富士山の宝永大噴火(宝永4年(1707))の降灰で埋まった皆瀬川の水捌け(洪水対策)のため、**伊勢津藩(藤堂家)**に手伝い普請を命じ、**宝永6年(1709)** から**皆瀬川の掘割(瀬替)工事**が行われた。この工事によって、皆瀬川は川村山北集落の手前で、直接酒匂川に流入し、皆瀬川の氾濫は抑えられた。皆瀬川の河道周辺が田畑に変わる効果もあった。

七代目弥五右衛門が、その瀬替えの影響で水不足に陥った川村山北、川村向原に皆瀬川の水を導く用水(**川入堰**)を享保19年(1734)時造った。

九代目三太夫が、元禄16年(1703)の大地震で水道が破壊され、水の供給が乏しくなった板橋台に水を導くため**元文4年(1739)御関所堰**を作った。

十代目弥太右衛門が、更なる新田開拓のため、酒匂川の瀬戸(四軒屋あたり)から取水し、川沿いの崖面を切り割り、隧道を穿ち、掛樋にて沢や川(皆瀬川堀割)を越え山北に水を導く**瀬戸堰**を開削した。安永7年(1779)に工事着工、4年かけて天明2年(1782)には完成の運びとなる。

その後も、湯山家当主は**川村岸堰**などの造成、瀬戸堰の改修などに努めた。



①**掘割**　湯山家六代目弥五右衛門の嘆願により、幕府は伊勢津藩(藤堂家)に手伝い普請を命じ、宝永6年(1709) から皆瀬川の掘割(瀬替)工事が行われた。工事は、多くの人足・百姓の手により8日で完了した。この工事によって皆瀬川の氾濫は抑えられた。皆瀬川の河道が田畑に変わる増産効果もあった。

②**川入堰**　七代目弥五右衛門が、その瀬替えの影響で水不足に陥った河村山北、河村向原に皆瀬川の水を導く用水路(川入堰)を享保19年(1734)に造った。岩盤の掘削を行う難工事であった。当時の代官は蓑笠之助であった。

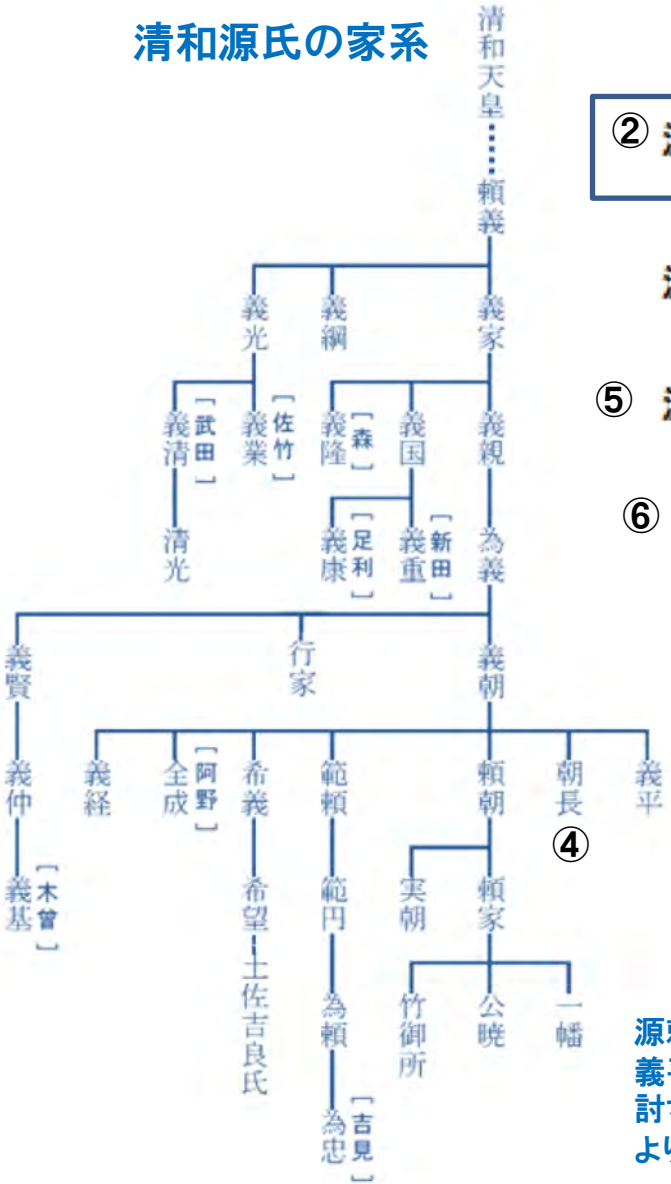
③**御関所堰**　九代目三太夫が、元禄16年(1703)の大地震で水道が破壊され、水の供給が乏しくなった板橋台(現在の台及び萩原地区)に板橋沢から水を導くため元文4年(1739)御関所堰を作った。

④**瀬戸堰**　十代目弥太右衛門が、水不足解消と新田開拓のため、酒匂川の瀬戸(四軒屋)に取水口を設け、川沿いの崖面を切り割り隧道を穿ち、掛樋で皆瀬川・板橋沢等を越え山北に水を導く瀬戸堰を開削した。安永7年(1779)工事着工、天明2年(1782)に完成した。取水口から皆瀬川掘割まで約3.5kmの大工事であった。

⑤**河村岸堰**　弥太右衛門は瀬戸堰の南山根堰から河村岸に分水するため、川村岸堰(隧道後2つに分流)を造成、その後の湯山家当主は瀬戸堰等の改修などに努めた。

相模波多野氏の由来

清和源氏の家系



① 佐伯経範

河内源氏の源頼義の家人の佐伯経資が頼義の相模守補任に際して、その目代となって相模国へ下向したのが波多野氏始めとされる。
経範の妻は藤原秀郷流藤原氏で、のちに波多野氏は藤原秀郷流を称した。
秦野盆地を中心に、沼田郷・河村郷・松田郷・大友郷などに一族を配した。

:

② 波多野遠義

実質波多野氏の祖。子どもは、義通の他、大友氏の祖大友経家、川村家の祖河村秀高、源義朝の側室等がいた。

波多野義通

③ 妹

関東に下向した源義朝に波多野遠義は娘を側室として出した。娘は、義朝次男の源朝長を生んだ。その後中原氏に嫁す。

⑤ 波多野義常　⑦波多野義景　④ 源朝長

源頼朝・義経の異母兄。相模国松田郷を領して松田冠者、松田殿とも呼ばれた。
平治の乱で平清盛と戦うが敗れ、落ち武者狩りに遭い負傷、傷がもとで1160年16歳で落命。

⑥ 松田有常　波多野盛通

⑤ 波多野家の当主義常は源義朝と仲たがいし（義朝の後嗣問題？）、義朝の遺児源頼朝が挙兵すると、義常は頼朝と敵対し、討手を差し向けられて1180年自害した。

⑥ 子の有常は、流鏑馬の技により頼朝の許しを得て、1188年松田郷を領した。有常が松田氏の祖。

⑦ 義常の弟波多野義景は頼朝の許しを得て、波多野本領を安堵された。

一族の波多野義重は北条重時の被官で、京都六波羅探題評定衆。
曹洞宗の開祖道元禅師と親しくしており、領地の越前志比荘に招聘し、永平寺建立に尽力した。義重の家系は、曹洞宗筆頭檀家になっている。

源頼朝の兄弟はいずれも末年を平穏に過ごしていない。
義平、朝長は平治の乱で死亡(1160)。平家との戦いの中で希義は自害(1181)、義円は討ち死(1182)。義経は頼朝から追放され奥州平泉で自刃(1189)。全成は2代目頼家により謀殺(1203)。範頼は頼朝により伊豆流刑、但し子どもは許された。

河村氏の興亡

相模の武士波多野遠義の子秀高は父から同国足柄上郡河村郷などの所領を譲られ、河村氏を称した。

秀高は源頼朝挙兵時に敵対したため所領没収されたが、秀高の息子義秀は1190年流鏑馬の技を頼朝に認められ、所領を回復した。
（これを記念して室生神社の流鏑馬が行われるようになったという）

河村城は、山城として酒匂川の河岸段丘の高いところに作られた。平素は平地の南原の館に住んでいたようである。

波多野義秀の弟千鶴丸は、文治5年（1189）の奥州藤原氏の討伐に参陣を許されて、功をたて、頼朝の命で元服し河村四郎秀清と名乗った。 戦後の論功行賞で、秀清は岩手郡・斯波郡の北上川東岸一帯と茂庭の地、そして摩耶郡の三ヶ所に所領を賜った。奥州河村の始まりである。

元弘の乱（1331～34）に際して、河村氏は松田氏らとともに、新田氏に協力し南朝方につき、北朝方の足利尊氏と対峙したといわれ、1352年（南朝：正平7年、北朝：文和元年）から2年間、河村秀国・河村秀経らは新田義興・脇屋義治と河村城に立てこもり、畠山国清を主将とする足利尊氏軍の攻撃をしのいだ。
しかし、南原（河村岸の台地）の戦いで大敗・落城し、河村一族の多くは討死し、新田義興・脇屋義治は中川城を経て甲州に逃れたとされる。
河村氏の残党の多くも河村岸の故地を逃れ、全国に四散した。

河村城は、河村氏滅亡の後も、大森氏、後北条氏により整備・利用された。
1590年の豊臣秀吉の小田原攻めの後、廃城となった。